Architectural Institute of Japan

日本建築学会大会学術講演梗概集
（九州） 2007年 8 月

建築家の創作におけるイメージと現実空間の＜隔たりの認識＞－その２

正会員　出口 広訓*
同　山田 深**
同　○丸山 友士***

隔たりの認識　イメージ　現実空間
現代建築　言説　建築家

１．序　建築家の創作におけるイメージと現実空間の隔たりの認識について、前編では、どのような＜隔たりの認識＞を持っているのかを抽出し、分類・整理した。引き続き本編では、＜隔たりの認識＞の通時的な変遷を考察することで、現代建築家の創作に対する思考の一端を捉えることを目的とする。

２．＜隔たりの認識＞の通時的考察　1950 年代から 2000 年代[1)]までにみられる＜隔たりの認識＞について、これまでに分類・整理した［意味内容］の各側面、カテゴリーを軸に通時的な考察を行う。

２．１ 対象資料の抽出率における通時的傾向　まず、各年代でどの程度＜隔たりの認識＞がされているのかをみていく（図１）。これは、イメージと現実の間の隔たりに建築家はどの程度意識的であるかという、建築家の創作における内省的な姿勢を年代毎にみることになる。図１では、1970 年が最も高い割合を示すことから、1970 年代は、建築の創作において内省的な姿勢をみせる建築家が多い時代であったといえ、2000年代もほぼ同じ割合を示していることから、現代もまた、建築家の内省的な創作姿勢が多くみられる時代だといえるのだろう。また、1950 年代、1960 年代の割合の低さは、戦後復興、高度経済成長の影響による建築ラッシュを背景に、建築家の内省的な面をみることができないと捉えることもできるが、1990年代の割合の低さは特徴的である。

２．２［意味内容］の通時的傾向　ここでは、分類・整理された＜隔たりの認識＞の［意味内容］について、通時的考察を行う（図２）。まず３つの側面に注目すると、【自己】が各年代において大きな比重を占めていることが分かり、1980 年代をピークに減少し、2000 年代には最低値となっている。これに反するような推移をみせているのは【関係】であり、1980 年代では、1950 年代を除いた中で最低であり、そこから 2000 年代まで増加し最高値を示している。【形式・規範】は、1990 年代で比較的高い割合を示していることが特徴としてあげられ、それに次いで 1960 年でも高い割合を示している。

さらに６つのカテゴリーに注目すると、《建築と人間》が 1980 年代から 1990 年代に全くみられないことが特徴的である。この 20 年間では、建築と人間の関係についての関心の弱さが窺え、【関係】の割合の低さの要因として考えられる。また、2000 年代の《方法論》の割合が非常に低く、これが【自己】の比率を下げている要因であると考えられ、対照的に、1990 年代は《方法論》の割合が最も多い年代である。1970 年代では、比較的、各カテゴリーが均等な割合を示していることが特徴として挙げられ、対象資料の抽出率の割合の高さも考慮すると、多くの建築家が様々な内容の＜隔たりの認識＞を持っている年代だといえる。

２．３ 各年代にみられる＜隔たりの認識＞の考察　ここでは、各年代の＜隔たりの認識＞を考察するとともに、特徴的な具体例を挙げていく（図３）。

1950年代は、建築家にみられる＜隔たりの認識＞が非常に少なく（図１）、抽出されたサンプルが少ないことから、傾向が大きく偏っている。＜隔たりの認識＞がここまで少ないことには、戦後復興の建築ラッシュを背景に、建築家の創作に対する内省的姿勢がみられないということが考えられる。住宅建築でも、最小限住居や工業化住宅の試みが主題となり、

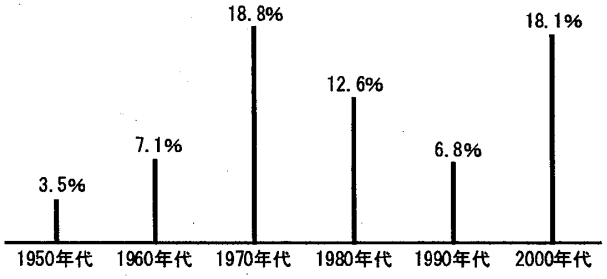

図１　対象資料の年代別抽出率の推移

図１註）『新建築』の建築家の言説から、＜隔たりの認識＞がみられる言説の割合を、各年代において示したもの。

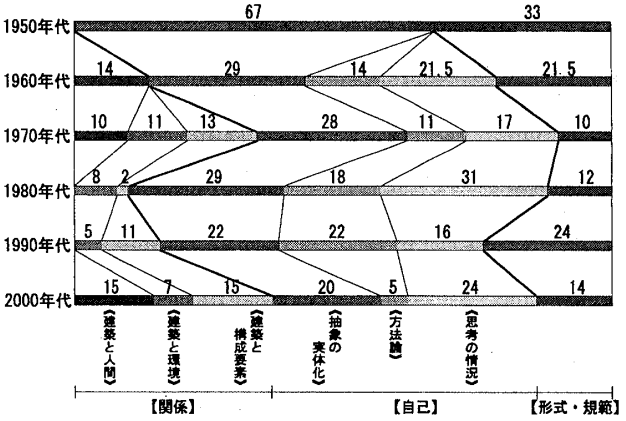

図２　＜隔たりの認識＞の［意味内容］年代別構成比

図２註）棒グラフの数値は、各年代にみられる＜隔たりの認識＞に対して、各カテゴリーの割合をパーセンテージ（%）により示したもの。

Thought of Difference between Image and Real Space
by Contemporary Japanese Architects (2)

DEGUCHI Hironori, YAMADA Shin, MARUYAMA Yuji

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

建築家が自らの創作を内省していた可能性は低いと考えられる。

1960 年代も、サンプル数が少ないことによる傾向の偏りがあるものの、【形式・規範】が多くみられ、【関係】は《建築と人間》のみがみられることが特徴的である。特徴的な具体例としては、和式から洋式の生活という、生活様式の急変による共通理念の消失によって、イメージした生活と、現実に住まう施主の生活に差異が生じることによる<隔たりの認識>がみられた。

1970 年代は、【関係】に含まれる全てのカテゴリーが比較的多くみられた。また、《抽象の実体化》もやや多く、具体的には、観念的なイメージの実体化における<隔たりの認識>が多くみられる。対象資料の抽出率の急増や、各カテゴリーの割合が比較的均等になっていることから、1970 年代は建築家にとって模索の時代であったといえる。

1980 年代は、【自己】が多く、【関係】が減少していることがわかる。【関係】は、ほぼ《建築と環境》が占めており、《建築と人間》は全くみられない。具体的には、激しく変化する環境を捉えることができないというものや、環境に対して、建築の表現を削り取る操作による<隔たりの認識>がみられる。また、【自己】の多さは、《方法論》と《思考の情況》の増加がその要因といえる。

1990 年代は、側面では【形式・規範】が比較的多くみられ、カテゴリーでは、《方法論》が最も高い割合を示している。《方法論》では、プログラムに関するものが複数みられる。この傾向は、新たな潮流をつくろうとする動きによって【形式・規範】が増加したと考えられ、それに応じて、新たな方法論の概念として登場した、プログラムへの関心の高さが窺える。

2000 年代は、【関係】が多くみられ、中でも《建築と人間》、《建築と構成要素》が多くなっている。具体的には、《建築と構成要素》ではそのほとんどが素材表現のイメージと、現実の素材の質感において<隔たりの認識>がみられ、建築家の素材表現への関心の高さが窺える。また、《方法論》が 1990 年代から減少していることも特徴的で、2000 年代は論理的方法によらない、人間のための空間の創作へと、建築家の意識が向いたものと考えられる。

3．結　以上、本論では、建築家の創作におけるイメージと現実空間の隔たりの認識を、現代建築家の創作に対する思考の一端として分析・考察してきた。前編では、<隔たりの認識>の［意味内容］を整理し、考察した。本編では、その［意味内容］を通時的に考察することによって、<隔たりの認識>の通時的な変遷をみたところ、いくつかの特徴的な傾向をみることができた。

1) ここで 2000 年代とは、2000 年から 2005 年までの６年間を指している。

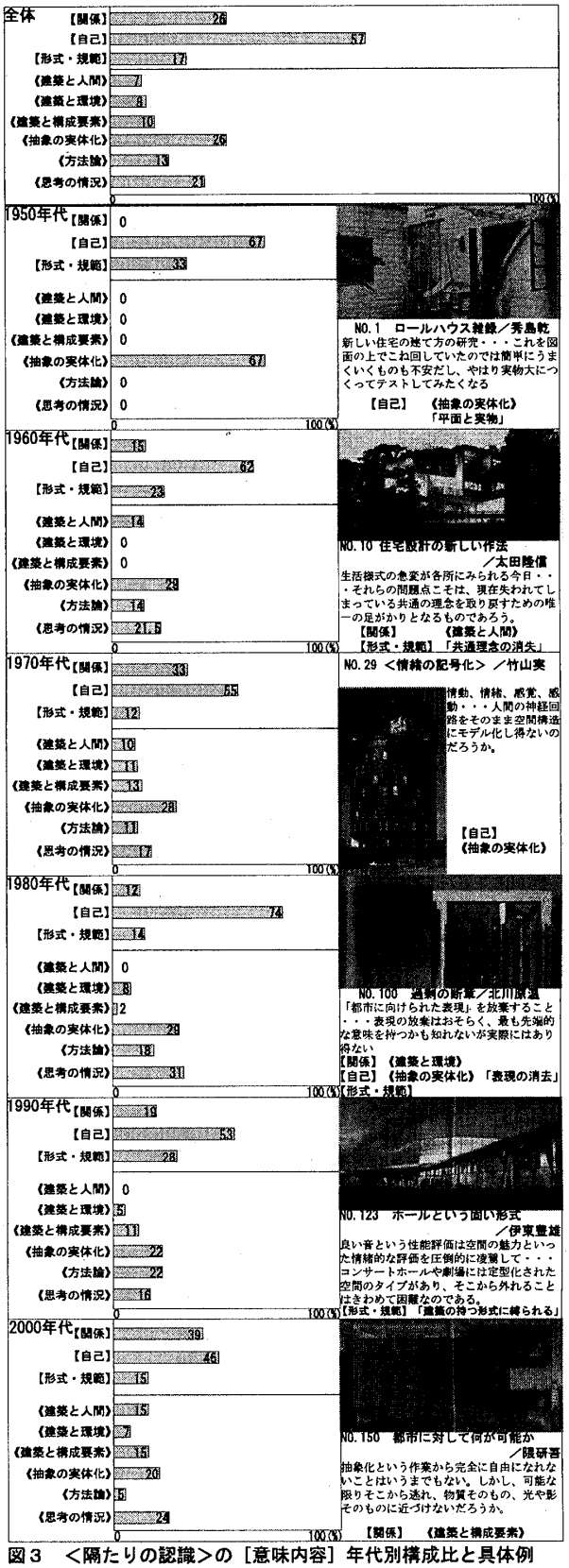

図３　<隔たりの認識>の［意味内容］年代別構成比と具体例

図３註）グラフの数値は、各年代にみられる<隔たりの認識>に対して、３つの側面および各カテゴリーの割合をパーセンテージ(%)により、年代別に示したもの。

*　アトリエブンク
**　室蘭工業大学建設システム工学科講師
***　室蘭工業大学大学院

*　Atelier BNK
**　Lecturer, Dept, of Civil Engineering and Architecture, Faculty of Engineering, Muroran Institute of Technology
***　Graduate school, Muroran Institute of Technology

NII-Electronic Library Service